

広報あきた
おかげさまで
1,500号

秋田の半世紀を見てきました。

戦争が終わり、昭和二十六年七月十五日に「広報あきた」が創刊されてから千五百号を迎えました。この間、半世紀。五十年の歴史って、長いのか、短いのか。ともあれ、昔の広報を見てみると、大きな時代の流れを感じます。創刊当時からの記事をちよつと拾い読み……。



まだ不便な時代だったんじゃないかな



昭和二十六年、創刊当時の秋田市は、人口増により水道の給水がままならない状態だったようです。創刊号一面(S26・7・15)には、「夜間断水、昼間制水に悩まされ、ポンプ場と配水管を突貫工事」の記事。第二号(S26・8・20)でも「本格化す秋田市水道工事」の見出しで、八橋、川尻地区で行っている配水管布設作業が紹介されています。

住宅事情も厳しくなってきたように、住宅難緩和のため「年内に庶民住宅30戸」(S26・8・20)と、市営住宅の建設。「越冬用木炭の入荷」(同

と題し、冬に備えて市で三万俵の炭を確保したというのも当時ならではの。

「人は右、車は左。さあ、皆で協力を！」(S26・10・20)と、道路の歩き方の細かい指導もありました。

「市民は何を希望してるか」(S26・11・5)は、市内十四か所で初めて開かれた市役所と町内協力員との懇談会の記事。白熱した質疑・応答の内容が、一ページにわたって紹介されています。

面白いのは「ネズミを取りましよう！」(S26・12・20)。伝染病を媒介するノミやシラミをまき散らすネズミを退治しよう、と、全市一斉のネズミ取りを呼びかけています。取



ハエ50匹でキャラメル1箱



いろいろ考えたのをおつた

ったネズミは子どもが学校へ持っていくと、市役所で一匹五円で買い上げるという仕組みでした。

「キャラメル付き蠅とり運動」(S27・6・1)が行われたのもこの頃。赤痢の原因ともなるハエは当時の大敵。ハエを五十四つかまえて市役所に持っていくと、キャラメル一箱と交換。「健康な街をボク達で」と、子どもたちに人気があったように、十日間で七万七千七百匹のハエが捕らえられたと報じています。

まだまだ伝染病なども多く、衛生面がとも心配な時代だったんですね。

「城下町大秋田市が近代的交通の発展に対応するには……」(S27・11・15)は、市民から募集した交通安全論文の紹介。人口、自動車が急増するなか、道路が狭く、十字路、曲折が

